View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Hiroshima University Institutional Repository

別記様式第６

論 文 審 査 の 要 旨

博士の専攻分野の名称	博　士（　文　学　）	氏 名	周　成梅
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当		

論　文　題　目

女房装束に関する研究

論文審査担当者

主　　査	教授	三浦　正幸
審 査 委 員	教授	安嶋　紀昭
審 査 委 員	教授	妹尾　好信
審 査 委 員	准教授	伊藤　奈保子
審 査 委 員	広島女学院大学・名誉教授	原田　佳子

〔論文審査の要旨〕

本論文は，日本の服飾史上で代表的な装束の一つである，平安時代中後期の女房装束に関して，唐衣の起源，袿の詳細，打出という作法など，その特質を論じる上で特に重要となる事柄に論題を絞り，主に往時の文献資料を用いて新たな考究を試みたものである。論文は全６章からなる。

第１章「女房装束の概要」では，女房装束の構成やその成立過程・変遷について概説する。

第２章「唐衣の起源について」では，女房装束のなかで最も上に着けられて格式が高い唐衣の起源について再考を加えている。奈良時代に中国唐より伝わった背子から発展して唐衣が成立したという従来の定説に対して，主に中国の文献や絵画資料などを用いて詳細に考察している。唐衣と同時代の宋代の背子は形態や着用制が全く相違すること，唐代の背子の形態は不明であるが，唐代の半臂は唐衣と形態がよく似ており，唐衣の起源が唐代の半臂にあるという新たな見解を提示した。

第３章「袿についての一考察」では，女房装束において中間に多数重ねて着けられる袿について，『紫式部日記』・『台記別記』・『雅亮装束抄』などの古記録を用いて，その名称・種類・文様・地質・重色目・儀礼などに関して改めて考察を加えている。

第４章「寝殿造の打出に関する研究」では，女房装束の裾や袖口などを寝殿造の邸宅の御簾の下からはみ出させておく，打出という儀礼について考察する。打出は室内から押し出すものとされていたが，『雅亮装束抄』を丹念に読み込んで，室外にいる人が引き出して細やかに調整していたことを明らかにした。また，女房が儀式の前に打出をする例に加えて，『台記別記』・『玉葉』などにより，身分の高い女房が接客中に打出をした例，男性の下級貴族が室外から打出を引き出して調えた例を紹介し，打出の作法の実態を詳細に明らかにした。とくに，儀式の最中に装束の打出をして，「刷る」という所作を行っていたことを初めて指摘し，装束を刷（擦）って音を立てることによって，儀式の進行の合図としていたとする。『兵範記』の記述によって，男性貴族の束帯についても刷るという行為で合図を送っていたことを指摘して傍証とする。さらに『今鏡』の小野雪見御幸の話に現れる女房装束の裁断についても考究し，袴の打出を事例として時代の下降による打出の作法の変遷についても論じている。

第５章「牛車の打出」では，『雅亮装束抄』における牛車の打出の作法を考察する。牛車での打出が部位によって３種類あったこと，牛車の打出でも女房装束の全構成要素にわたっていたこと，狭い牛車においても装束の重ね目をよく見せ，揺れてもずれない工夫がなされていたことを示した。

第６章「女房装束の特質」は本論文の結論である。女房装束には，従来言われていたような，装飾，身分の表徴，季節感の表示といった役割や特色のほかに，平安時代後期においては打出という作法に儀式の進行上での重要な役割があったと考え，とくに宮中や摂関家の邸宅で行われていた儀式に取り組まれた女房装束は極めて公的な存在であったとする。

本論文は，女房装束に関連する事項のなかから注目される事柄について，同時代の文献資料を渉猟して詳細に考察を加えたものである。各章の構成に統一感がないことがやや惜しまれるが，とくに唐衣の起源について従来の定説を否定し，十分に首肯できる新たな自説を提示したこと，従来はほとんど等閑視されていた打出という作法の詳細を初めて考究し，女房装束の特質の一端を新たに示したことは，服飾史の研究に貢献する成果として高く評価される。

以上，審査の結果，本論文の著者は博士（文学）の学位を受ける十分な資格があるものと認める。

備考　要旨は，1,500 字以内とする。